

宮崎県 140年のあゆみ



宮崎県
シンボルキャラクター **みやざき犬** びん

置県140年を迎えて

宮崎県知事 河野 俊嗣

明治16年（1883年）5月9日、鹿児島県に併合されていた宮崎県を再配置する布告が出され、宮崎県は、現在の県域をもって新しい歴史を歩み始め、令和5年（2023年）に140年の記念すべき年を迎えました。

ひたすら郷土の発展を願い、不屈の精神で分県運動に全力を尽くされ、今日の宮崎県の礎を築いた「宮崎の父」と敬愛される川越進翁をはじめとする幾多の先人達の御尽力に深く敬意を表するとともに、これまで歩んできた140年の歴史の重みを感じております。

本県はこれまで、農林水産業や商工業など産業の振興、道路・空港・港湾施設等のインフラ整備、医療・福祉対策など県民生活に関わる様々な課題に加え、台風や口蹄疫など数々の災害、さらには近年の新型コロナウイルス感染症への対応等、多くの困難に直面してきましたが、県民の皆様をはじめ、企業、関係団体、行政などが力を合わせてこれらの難局を乗り越え、今日の宮崎県の姿を築いてまいりました。

また、脈々と引き継がれてきた歴史の中で、より良い宮崎を創造するための県民の皆様のため努力と、絆を大切にする穏やかで優しい県民性によって、全国に誇れる素晴らしい魅力が育まれてきたものと感謝しております。

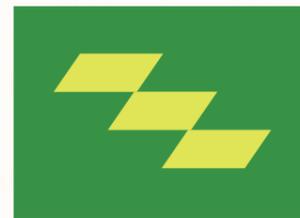
置県40年の節目に当たり、あらためて地域の宝を見つめ直し、郷土への誇りや愛着を深める機会にするとともに、宮崎ならではの貴重な資源を生かしながら、各地域の活性化や更なる県勢発展に向け県民の皆様とともに取り組んでまいります。

安心と希望あふれる本県の未来に向け、今後とも県民の皆様のご理解と御協力をお願いいたします。



県旗

(昭和39年12月22日制定)



この旗は、県のシンボルであるみどり（黄色）をあらわし、宮崎のミをかたちどり、段階をふんで高まる県の躍進の姿をあらわしています。昭和38年が、明治16年に宮崎県が再置されてから80年になることから、置県80周年を記念して、県民の皆さんから公募した結果、決まりました。

県章

(明治45年1月14日制定)



「日向」の文字、つまり宮崎県をあらわしたもので「日」を中心に「向」が三方にのびて、躍進する県の姿を示しています。

宮崎県のシンボル

県の鳥



コシジロヤマドリ

県の花



はまゆう

県の木



フェニックス



オビスギ



ヤマザクラ

宮崎県の情報

都市公園面積 (人口1人当たり)

17.71㎡

<全国3位>



全国 10.12㎡
国土交通省 令和2年3月31日

日照時間

2,122時間

<全国6位>



気象庁「観測平年値(1991~2020)」
令和2年

県民所得 (1人当たり)

2,426千円

<全国46位>



1人当たり国民所得3,181千円
内閣府 令和元年度

人口

1,070千人

<全国35位>



全国 126,146千人
総務省「国勢調査」 令和2年10月1日

保有自動車数 (人口千人当たり)

897.5台

<全国7位>



全国 654.8台
一般財団法人自動車検査登録情報協会
「自動車保有台数」 令和4年3月31日

林業産出額

372億円

<全国4位>



全国 4,839億円
農林水産省 令和3年

農業産出額

3,478億円

<全国4位>



全国 88,600億円
農林水産省 令和3年

合計特殊出生率

1.64

<全国3位>



全国 1.30
厚生労働省 令和2年

宮崎県140年のあゆみ

県勢の発展と充実

- ←2000年
- 22 [令和4] 宮崎カーフェリー 新船就航
- 22 [令和4] 第12回全国和牛能力共進会で4大会連続の内閣総理大臣賞受賞
- 20 [令和2] 防災庁舎の完成
- 19 [平成31] 「みやざき林業大学」開講
- 16 [平成28] 東九州自動車道宮崎市～北九州市間全線開通
- 15 [平成27] 高千穂郷・椎葉山地域の世界農業遺産認定
- 15 [平成27] 「第18回全国農業担い手サミット」みやざき
- 15 [平成27] 「第18回全国「みどりの愛護のつどい」
- 11 [平成23] みやざき県シンボルキャラクター「みやざき大」誕生
- 11 [平成23] 新燃岳が噴火
- 11 [平成23] 高病原性鳥インフルエンザ発生
- 10 [平成22] 口蹄疫発生（終息宣言）
- 08 [平成20] 宮崎～台北国際定期便運航開始
- 05 [平成17] 第59回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」
- 04 [平成16] 第55回全国植樹祭（西都市）
- 03 [平成15] 宮崎大学と宮崎医科大学が統合
- 03 [平成15] 県立産業技術専門学校開校
- 00 [平成12] 九州・沖縄サミット 宮崎外相会合
- 00 [平成12] 細島港国際ターミナル供用開始
- 00 [平成12] 宮崎～ソウル国際定期便運航開始
- 99 [平成11] 第16回全国都市緑化みやざきフェア 太平洋・島サミット
- 99 [平成11] 県立看護大学開学
- 97 [平成9] 日向灘地震
- 96 [平成8] J-R宮崎空港連絡鉄道開通
- 95 [平成7] 九州縦貫自動車道 宮崎線全線開通
- 95 [平成7] 第15回全国豊かな海づくり大会（油津港）
- 94 [平成6] フォレストピア学びの森学校開校
- 93 [平成5] 宮崎学園都市完成
- 88 [昭和63] 宮崎白南海岸リゾート構想リゾート法第1号指定
- 87 [昭和62] 宮崎港が開港
- 86 [昭和61] 第10回全国育樹祭（小林市夷守台）
- 83 [昭和58] 「新ひむかづり運動」県民会議発足
- 83 [昭和58] 置泉100年記念式典
- 81 [昭和56] 九州縦貫自動車道 宮崎線全線開通
- 76 [昭和51] 九州縦貫自動車道 宮崎線えびの～高原間開通
- 75 [昭和50] 日本初のサブマリナ「宮崎サブマリナ」開園
- 75 [昭和50] 土呂久鉱害提訴
- 74 [昭和49] 宮崎医科大学開学
- 73 [昭和48] 第24回全国植樹祭（小林市夷守台）
- 72 [昭和47] 九州縦貫自動車道 宮崎線着工
- 71 [昭和46] 宮崎カーフェリー就航（細島～川崎）
- 71 [昭和46] 日本カーフェリー就航（細島～川崎）
- 68 [昭和43] 細島工業港に15,000トン公共岸壁完成
- 68 [昭和43] えびの地震
- 66 [昭和41] 宮崎空港 地方空港として初のジェット化
- 64 [昭和39] 宮崎の島を制定
- 64 [昭和39] 日向・延岡地区を新産業都市に指定
- 62 [昭和37] 農業後継者づくりを目的としたSAP運動開始
- 60 [昭和35] 島津久永貴子夫妻新婚旅行 新婚旅行チーム到来
- 59 [昭和34] 新燃岳が噴火（1821年以来138年ぶり）
- 54 [昭和29] 宮崎空港開港（極東航空三現全日空ローカル線）
- 54 [昭和29] 航空大学校開校
- 51 [昭和26] 石河内第1発電所完成
- 49 [昭和24] 宮崎大学が農・学芸・工の3学部で開学
- 47 [昭和22] 6・3・3・4制の教育開始
- 47 [昭和22] 地方自治法による第1回知事市町村長選挙
- 45 [昭和20] 県内各地で米艦上機による初の空襲
- 42 [昭和17] 宮崎県で天然痘発生 患者50人以上
- 41 [昭和16] 国民学校の発足
- 40 [昭和15] 日向建国博覧会（紀元2600年）
- 40 [昭和15] 八幡之基柱
- 37 [昭和12] 祖國振興隊結成
- 32 [昭和7] 新県庁舎完成
- 27 [昭和2] 小林立火1198棟焼失
- 23 [大正10] 国鉄日豊本線全線開通
- 21 [大正9] 県立宮崎病院開院
- 20 [大正9] 第1回国勢調査実施
- 18 [大正7] 宮崎県公報第1号発行
- 13 [大正2] 県営鉄道営業開始
- 89 [明治22] 町村制施行・県下100町村
- 89 [明治22] 宮崎県立尋常中学校開校
- 85 [明治18] 宮崎県師範学校開校
- 83 [明治16] 宮崎県の再置・宮崎県庁開庁
- 77 [明治10] 西南戦争
- 76 [明治9] 鹿児島県へ併合
- 74 [明治7] 宮崎学校の設立
- 73 [明治6] 初期宮崎県の設置
- 71 [明治4] 美々津県・都城県の設置
- 71 [明治4] 廃藩置県

高度経済成長

- 79 [昭和54] 第15回全国身体障害者スポーツ大会
- 79 [昭和54] 第34回国民体育大会（宮崎大会）
- 74 [昭和49] ダンロップフェニックストーナメント始まる
- 70 [昭和45] UMKテレビ宮崎開局
- 60 [昭和35] NHK宮崎放送局 テレビ放送開始
- 60 [昭和35] FMKラジオ宮崎 テレビ放送開始
- 59 [昭和34] 読売巨人軍 宮崎キャンプ始まる
- 59 [昭和34] 県立図書館全焼
- 52 [昭和27] 西都原古墳群 特別史跡指定
- 54 [昭和29] FMKラジオ宮崎（現・MRT宮崎放送）開局
- 40 [昭和15] 日向日日新聞（現宮崎日日新聞）創刊

戦後復興と新時代

- 2022 [令和4] 「五ヶ瀬の荒跡」ユネスコ無形文化遺産登録決定
- 21 [令和3] 国文祭・芸文祭みやざき2020
- 21 [令和3] 海外代表チーム事前合宿
- 21 [令和3] 東京2020オリンピック聖火リレー
- 21 [令和3] 東京2020オリンピックピックパラリンピック
- 19 [令和2] 2019 ISAWワールドサーフィンゲームス ランバード代表公開チームキャンプ
- 19 [令和2] 日本代表事前チームキャンプ
- 19 [令和2] ランバードワールドカップ2019
- 18 [平成30] 南国宮崎の古墳景観（西都市宮崎市新富町）
- 17 [平成29] 相母・傾・大崩ユネスコエコパークの登録決定
- 14 [平成26] 第6回IBAF女子野球ワールドカップ2014 宮崎大会
- 10 [平成22] 第34回全国高等学校総合文化祭
- 09 [平成21] 第22回全国スポーツ・レクリエーション祭「スポレクみやざき2009」
- 08 [平成20] 読売巨人軍宮崎キャンプ50周年
- 06 [平成18] 2006年フットボールワールドカップ
- 04 [平成16] 県立西都原考古博物館開館
- 02 [平成14] 2002サッカーワールドカップ ドイツ・スウェーデン代表チームキャンプ
- 01 [平成13] 日本スポーツマスターズ2001 宮崎大会
- 01 [平成13] 新県営野球場「サンマリスタジアム宮崎」オープン
- 96 [平成8] 第9回全国健康福祉祭みやざき大会
- 96 [平成8] 第1回宮崎国際室内音楽祭
- 95 [平成7] 県総合文化公園グランドオープン
- 93 [平成5] 第10回世界ベテランズ陸上競技選手権大会
- 92 [平成4] 全国高等学校総合体育大会
- 90 [平成2] ゴールデンゲームズのへおが始まる
- 84 [昭和59] FM宮崎開局

近代化の波

- ←1900年
- 40 [昭和15] 日向建国博覧会（紀元2600年）
- 37 [昭和12] 祖國振興隊結成
- 32 [昭和7] 新県庁舎完成
- 27 [昭和2] 小林立火1198棟焼失
- 23 [大正10] 国鉄日豊本線全線開通
- 21 [大正9] 県立宮崎病院開院
- 20 [大正9] 第1回国勢調査実施
- 18 [大正7] 宮崎県公報第1号発行
- 13 [大正2] 県営鉄道営業開始
- 89 [明治22] 町村制施行・県下100町村
- 89 [明治22] 宮崎県立尋常中学校開校
- 85 [明治18] 宮崎県師範学校開校
- 83 [明治16] 宮崎県の再置・宮崎県庁開庁
- 77 [明治10] 西南戦争
- 76 [明治9] 鹿児島県へ併合
- 74 [明治7] 宮崎学校の設立
- 73 [明治6] 初期宮崎県の設置
- 71 [明治4] 美々津県・都城県の設置
- 71 [明治4] 廃藩置県

宮崎県誕生のあゆみ

- ←1800年
- 71 [明治4] 廃藩置県
- 71 [明治4] 美々津県・都城県の設置
- 73 [明治6] 初期宮崎県の設置
- 74 [明治7] 宮崎学校の設立
- 76 [明治9] 鹿児島県へ併合
- 77 [明治10] 西南戦争
- 83 [明治16] 宮崎県の再置・宮崎県庁開庁
- 85 [明治18] 宮崎県師範学校開校
- 89 [明治22] 町村制施行・県下100町村
- 89 [明治22] 宮崎県立尋常中学校開校
- 13 [大正2] 県営鉄道営業開始
- 18 [大正7] 宮崎県公報第1号発行
- 20 [大正9] 第1回国勢調査実施
- 21 [大正9] 県立宮崎病院開院
- 23 [大正10] 国鉄日豊本線全線開通
- 27 [昭和2] 小林立火1198棟焼失
- 32 [昭和7] 新県庁舎完成
- 37 [昭和12] 祖國振興隊結成
- 40 [昭和15] 日向建国博覧会（紀元2600年）
- 40 [昭和15] 八幡之基柱
- 41 [昭和16] 国民学校の発足
- 42 [昭和17] 宮崎県で天然痘発生 患者50人以上
- 45 [昭和20] 県内各地で米艦上機による初の空襲
- 47 [昭和22] 6・3・3・4制の教育開始
- 47 [昭和22] 地方自治法による第1回知事市町村長選挙
- 49 [昭和24] 宮崎大学が農・学芸・工の3学部で開学
- 51 [昭和26] 石河内第1発電所完成
- 54 [昭和29] 宮崎県立産業観光博覧会
- 54 [昭和29] 航空大学校開校
- 54 [昭和29] 宮崎空港開港（極東航空三現全日空ローカル線）
- 59 [昭和34] 新燃岳が噴火（1821年以来138年ぶり）
- 60 [昭和35] 島津久永貴子夫妻新婚旅行 新婚旅行チーム到来
- 62 [昭和37] 農業後継者づくりを目的としたSAP運動開始
- 64 [昭和39] 日向・延岡地区を新産業都市に指定
- 64 [昭和39] 宮崎の島を制定
- 66 [昭和41] 宮崎空港 地方空港として初のジェット化
- 68 [昭和43] えびの地震
- 68 [昭和43] 細島工業港に15,000トン公共岸壁完成
- 71 [昭和46] 日本カーフェリー就航（細島～川崎）
- 71 [昭和46] 宮崎カーフェリー就航（細島～神戸）
- 72 [昭和47] 九州縦貫自動車道 宮崎線着工
- 73 [昭和48] 第24回全国植樹祭（小林市夷守台）
- 74 [昭和49] 宮崎医科大学開学
- 75 [昭和50] 日本初のサブマリナ「宮崎サブマリナ」開園
- 75 [昭和50] 土呂久鉱害提訴
- 76 [昭和51] 九州縦貫自動車道 宮崎線えびの～高原間開通
- 81 [昭和56] 九州縦貫自動車道 宮崎線全線開通
- 83 [昭和58] 置泉100年記念式典
- 83 [昭和58] 「新ひむかづり運動」県民会議発足
- 86 [昭和61] 第10回全国育樹祭（小林市夷守台）
- 87 [昭和62] 宮崎港が開港
- 88 [昭和63] 宮崎白南海岸リゾート構想リゾート法第1号指定
- 93 [平成5] 宮崎学園都市完成
- 94 [平成6] フォレストピア学びの森学校開校
- 95 [平成7] 九州縦貫自動車道 宮崎線全線開通
- 95 [平成7] 第15回全国豊かな海づくり大会（油津港）
- 96 [平成8] J-R宮崎空港連絡鉄道開通
- 96 [平成8] 日向灘地震
- 97 [平成9] 県立看護大学開学
- 99 [平成11] 第16回全国都市緑化みやざきフェア 太平洋・島サミット
- 00 [平成12] 細島港国際ターミナル供用開始
- 00 [平成12] 宮崎～ソウル国際定期便運航開始
- 01 [平成13] 宮崎外相会合
- 03 [平成15] 宮崎大学と宮崎医科大学が統合
- 03 [平成15] 県立産業技術専門学校開校
- 05 [平成17] 第59回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」
- 08 [平成20] 宮崎～台北国際定期便運航開始
- 10 [平成22] 口蹄疫発生（終息宣言）
- 11 [平成23] 高病原性鳥インフルエンザ発生
- 11 [平成23] 新燃岳が噴火
- 11 [平成23] みやざき県シンボルキャラクター「みやざき大」誕生
- 15 [平成27] 「第18回全国農業担い手サミット」みやざき
- 15 [平成27] 「第18回全国「みどりの愛護のつどい」
- 15 [平成27] 高千穂郷・椎葉山地域の世界農業遺産認定
- 16 [平成28] 東九州自動車道宮崎市～北九州市間全線開通
- 19 [平成31] 「みやざき林業大学」開講
- 20 [令和2] 防災庁舎の完成
- 22 [令和4] 新県立宮崎病院開院
- 22 [令和4] 宮崎カーフェリー 新船就航
- 22 [令和4] 第12回全国和牛能力共進会で4大会連続の内閣総理大臣賞受賞

郷土の先覚者

P.31

P.23

P.19

P.17

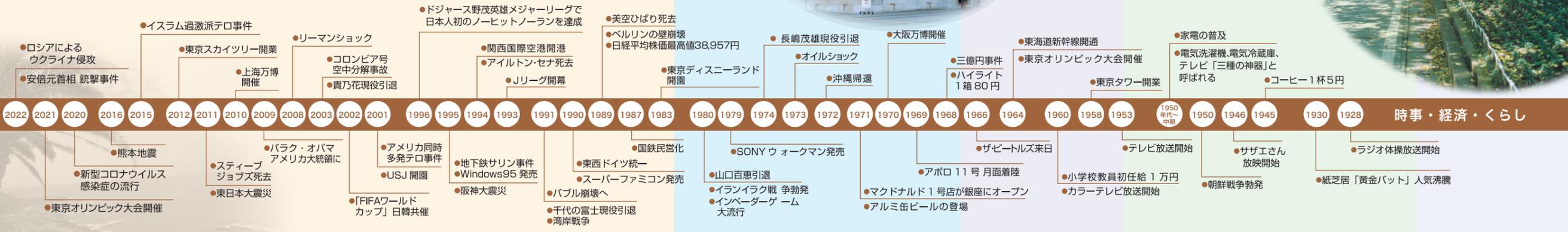
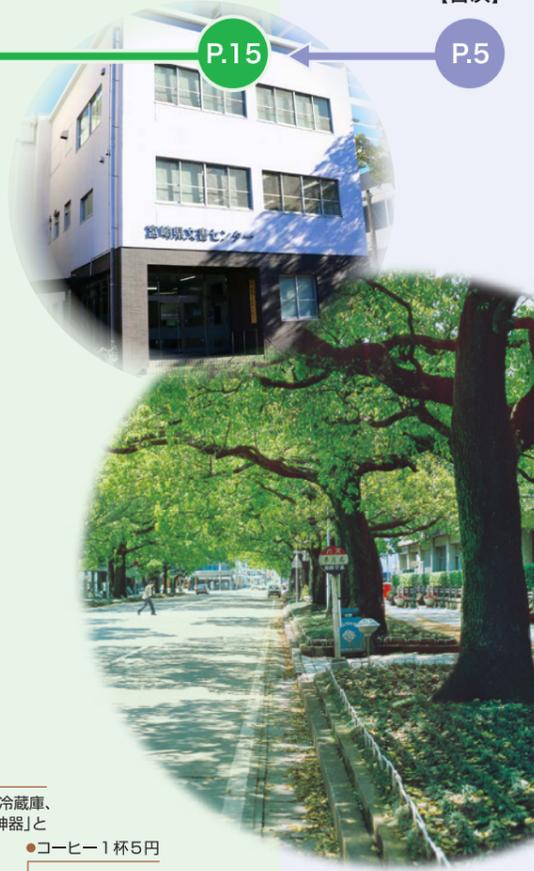
P.15

P.5

【目次】

スポーツ・文化の発信

P.27



宮崎県 誕生の あゆみ



「朝日の直刺す国、夕日の日照る国」とたとえられたこの(日向)の地は、「記紀」に描かれた(日向神話)をはじめ、ロマンあふれる伝承と、明るい陽光、豊かな自然に恵まれた私たちのふるさとです。古代から中世・近世へとつながる長い歴史を通じて、先人たちによる営々としたいとнамиがありました。

わが(宮崎)は、どのようにして近代のあけぼのを迎えたのでしょうか。

明治政府により、明治四年(一八七一年)七月、「廢藩置縣」が断行され、延岡・高鍋・佐土原・飢肥の四藩が廃止され、同年十一月、日向国には大淀川を境にして美々津県と都城県の二県が置かれた。その翌年には、県域の部分的な変更を行った。(府県三府七十二県)

その後、明治六年(一八七三年)美々津県と都城県を併合して、宮崎県とした。この置県を「初期宮崎県」という。明治九年(一八七六年)には、全国は三府三十五県にまとめられた。

初代の県参事(後の知事)は福山健偉である。福山は人民に宮崎県を意欲させようと考え、政府の認可を得ないまま、明治七年(一八七四年)に新県庁舎を落成させた。県庁舎を中核として次第に市街地が形成され、県都・宮崎の中心部も発展し始めた。

しかし、

その後県勢はなかなか進展しないまま明治九年(一八七六年)宮崎県は廃止され、鹿児島県に併合された。西南戦争終結後、戦後の始末や地域の発展を図る中で鹿児島県に併合されている不都合が次第に判明し、鹿児島県から分離独立する動きが起こった。

その中心人物が川越進である。川越進を中心に多くの困難を乗り越えて「日向分県運動」が進められ、明治十六年(一八八三年)五月九日、ついに宮崎県が再置され、近代宮崎県がスタートした。



西南戦争と宮崎県

明治十年(一八七七年)二月十五日、明治政府樹立の中心人物である西郷隆盛と西郷のもとに集まった旧藩時代の武士、農民など一万五千の徒党が、軍事行動を起こし、熊本城を包囲して戦いとなった。西南戦争である。

この西南戦争に、日向国(宮崎県)から出兵したものは、旧士族・農民あわせて一万人とも言われている。

鹿児島を出た西郷軍は、熊本城を攻め優位に戦いを進めていたが、優勢な政府軍が熊本に向かって南下し始めた。これを阻止しようとする西郷軍が、熊本市郊外の田原坂で激突し、ここが西南戦争最大の戦場となった。両軍の衝突は二月二十二日から始まり、三月四日から激戦が続いたが、三月二十日に政府軍が西郷軍の陣地を突破したので、以後西郷軍は退却を重ねることになった。

西郷軍は政府軍に追われ、都城、宮崎、佐土原、高鍋などを戦渦に巻き込んで延岡から北川の可愛岳の麓に包囲された。七月から八月の間、

日向地域が戦場と化した。同年八月十五日、延岡から北川の戦いで西郷軍は崩壊し、政府軍に降伏した。この戦いは宮崎県に大きな傷跡を

残した。田畑が荒らされ、牛馬が徴発され、役所の公金が奪われた。農繁期の人馬の徴発で農村は苦しみ、『西郷札』と呼ばれる西郷軍の紙幣の乱発で経済も混乱した。また、宮崎県の将来を背負うべき若

く有能な人材が、西郷軍に動員されて失われた。西南戦争後、明治政府は殖産興業、文明開化政策を進めていったが、宮崎県にとって鹿児島からの独立という大きな課題が残った。



宮崎県の分県運動

鹿児島県会

明治十六年(一八八三年)三月

それでは「鹿児島県下日向国分離ノ建議案」につき決をとります。

出席議員四十一名中、賛成三十九名。よって、可決されました。

ああ藤田君、ようやく積年の望みがかなったな…

川越先生、やりましたね!! おめでとうございます!!



宮崎県再置当時の県庁舎



初代県令 田辺輝実

明治十六年(一八八三年)、二月末から三月末にかけての鹿児島県会で、「鹿児島県下日向国分離ノ建議案」が可決され、五月九日に宮崎県が再置された。
初代県令(県知事)は田辺輝実。
戸数七万八千九百一十五戸、人口三十七万七千五百九十九の出発であった。

しかし、宮崎県が再置される道のりは、決して簡単ではなく、紆余曲折があった。

時はさかのぼって明治十三年(一八八〇年)。徳島県が高知県から分県した。それがきっかけとなり、宮崎県でも分県運動が活発になっていった。

当時、那珂郡選出の鹿児島県議であった川越進は、宮崎県再置の運動組織として「日州親睦会」を結成し、その代表となる。



分県運動時代の川越進

この頃地方巡視に来ていた鹿児島県令の岩村通俊に川越らは宮崎県再置の実現にむけて働きかけていた。

このままでは日向国の発展は望めません。

岩村県令、是非宮崎県に分県独立のうしろだてとなっていただきたいのです。

…すまないが、私ごとでは力になれない。他を当たってくれたまえ。

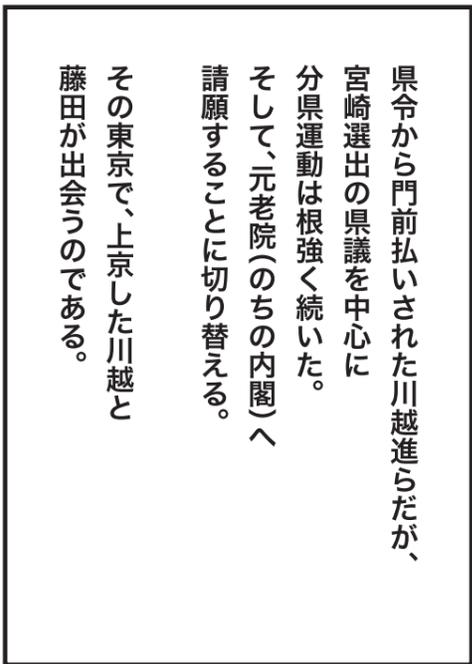
岩村の後任の県令、渡辺千秋にも川越進らは「分県請願書」を提出して県令としての後押しを頼んだが、実現困難だとして門前払いをされた。

明治十四年(一八八一年)秋
臼杵郡恒富村(現在の延岡市)出身の
鹿児島県議 藤田哲蔵が
延岡から東京に向かう。



このとき、
藤田は弱冠二十六歳。

県令から門前払いされた川越進らだが、
宮崎選出の県議を中心に
分県運動は根強く続いた。
そして、元老院(のちの内閣)へ
請願することに切り替える。
その東京で、上京した川越と
藤田が出会うのである。



東京

日向の独立、
想いは
ひとつじゃ!!

一致団結した
二人の熱の入った
分県運動が始まった。



頑張りましょう!!

川越先生、
必ず成功
させましょう。

川越らは、まず、
政府に出仕していた
秋月種樹のもとを訪れる。

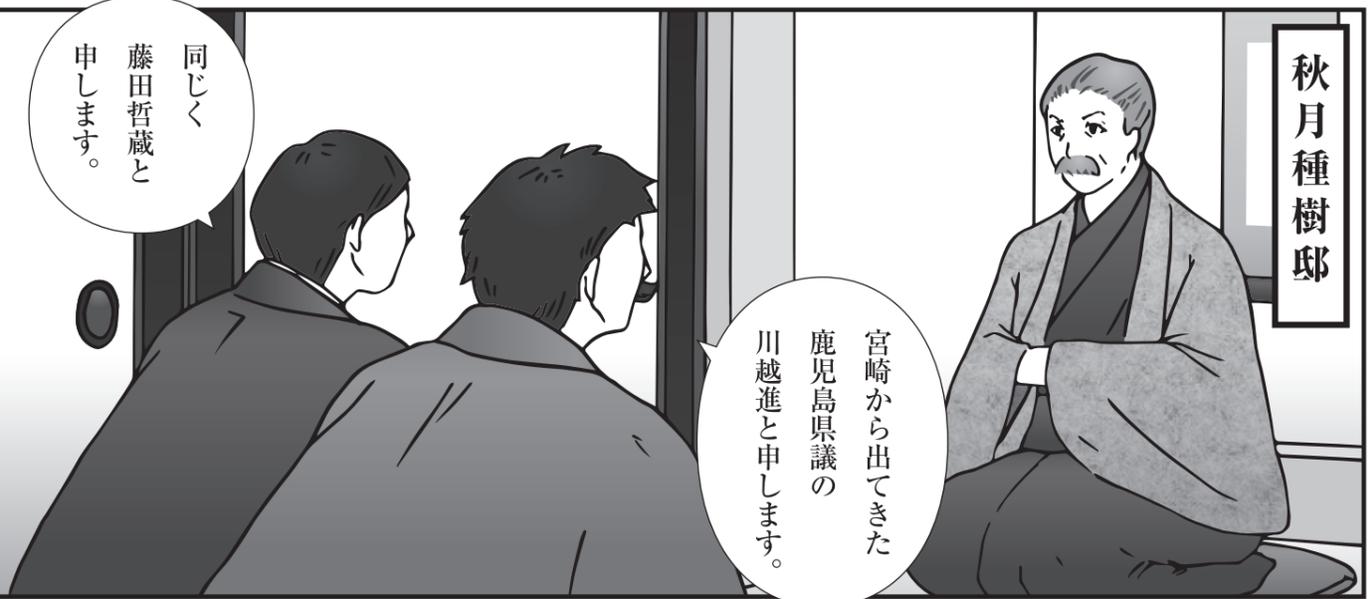


秋月種樹は高鍋藩主の弟であり、昌平
学校で安井息軒に学びました。後に江戸幕
府の学問所奉行となります。明治に入っ
てからは新政府に招かれ、明治天皇の侍
読(個人教授)となるなどしました。

秋月種樹邸

宮崎から出てきた
鹿児島県議の
川越進と申します。

同じく
藤田哲蔵と
申します。



秋月様、
戦後の復興も
薩摩・大隅を優先され、
宮崎は後回しに
される始末です。

このまま
黙っている
わけには…

今、宮崎県として
誇りを持って
立ち上がる時なのです。



明治十五年二月
東京での八十日間の
独立運動を終えて、
川越、藤田が
宮崎に帰ってきた。



そして、同年三月
「日向国分離ノ建議案」
が鹿児島県会に
上程された。

残念で
なりません。
川越先生。

ああ、残念だ…
親しい大隅の議員たちに
声をかけておいたのだが、
もうひと押しだったか…

…しかし、僅差で
否決された。

いや、分県がかなうまでは
まだまだ私はあきらめないぞ。

民衆の願いなのです!!
あきらめるわけには
いきません!!

もつともじゃ。
なんとかしてあげたいのは
私だけではないのだが…

どうしたら
いいのですか…

原因は
鹿児島
の
反対派か…

うむ…

自由民権運動が
全国的な広がりを見せ、
分県の意識が民衆にも
どんどん広がった。
宮崎での弾劾演説会では
弁士の岩切門二が
熱弁をふるった。

われら
宮崎県民の声を
代弁しろ!!

こら!!
渡辺県令!!

このあと、川越と藤田の二人は
主方久元（内務大輔・のちの内務次官）
三好退蔵（高鍋出身・のちの大審院長）
伊藤博文（長州出身・のちの総理大臣）
山県有朋（長州出身・陸軍大将・参事院議長）
などの有力者を次々に訪問していった。

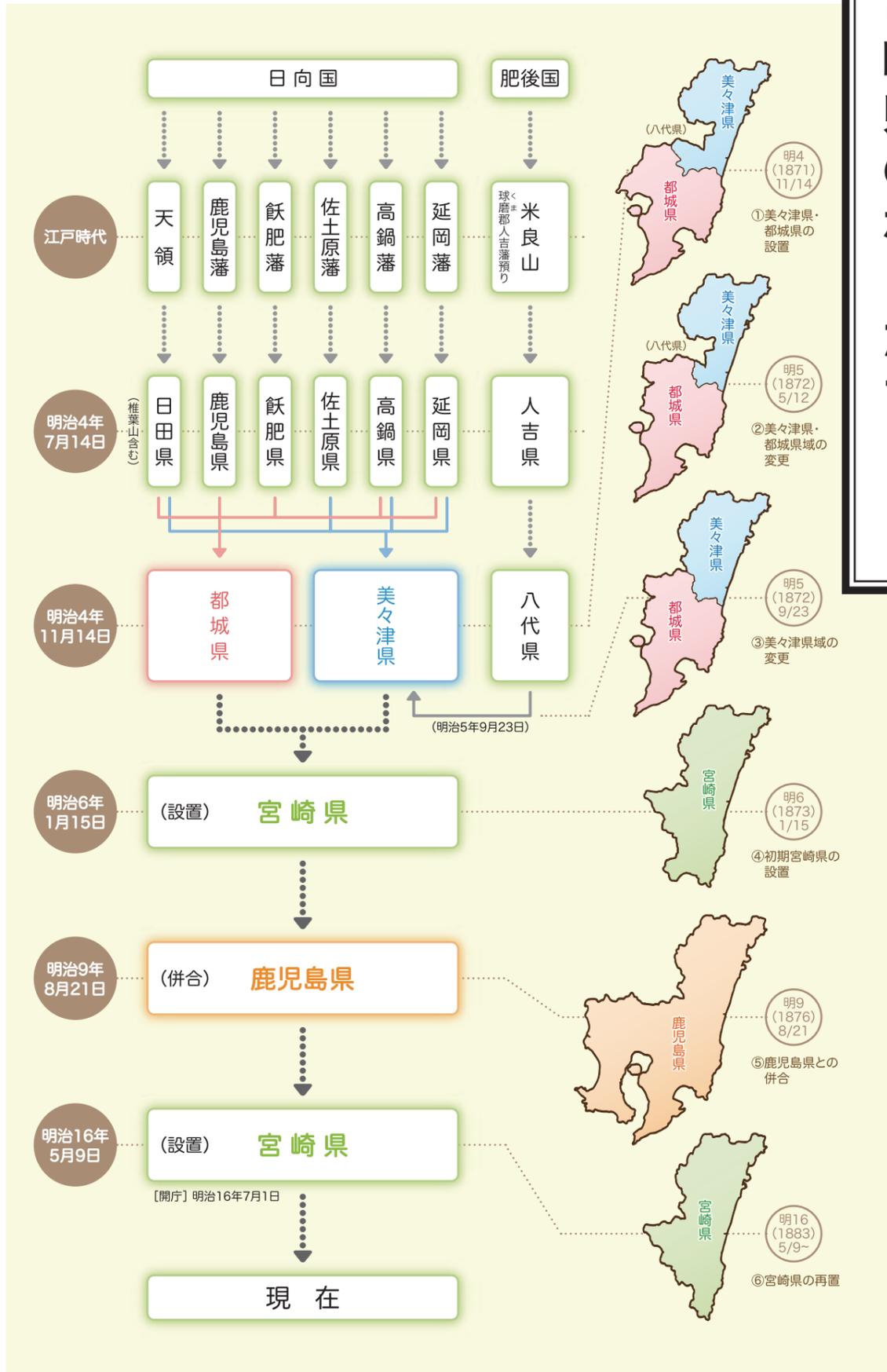
それは、有力者たちの心を
徐々に動かしていったのである。
そして、政府当事者より「分県のこと
は鹿児島県会を通じて願ひ出よ」との情報を得た。

弁士中止!!
県令を愚弄するとは
なにごとだ!!

俺は逮捕されても
分県運動を続けるぞ!!

岩切門二は宮崎県再置に
貢献した一人である。
しかし弾劾演説で、
鹿児島県令の渡辺千秋を
罵倒し、検挙された。

宮崎県のなりたち



明治十六年（一八八三年）二月
川越進が鹿児島県会議長となった。

川越先生が県会議長になられたからにはもう安心です!!
宮崎県の独立はすぐそこですね!!



おめでとうございます
ごさます

二月から三月にかけての鹿児島県会で、再び「日向国分離ノ建議案」が上程された。川越進議長は薩摩出身議員の分裂の間隙をぬって巧みに議事をリードした。

そして…

……賛成三十九名。
よって、「鹿児島県下日向国分離ノ建議案」は可決成立しました。



●その後の川越進

「日向国分離ノ建議案」が可決されると、川越進はさっそく上京し、鹿児島県会議長という立場で山田顕義内務卿に分県建議書を申達しました。

四月二十五日、参事院で「宮崎県ヲ置クハ適宜ノ分割ト認定ス」との結論が出され、三条実美太政大臣への上申を経て、五月九日に宮崎県再置の布告がなされました。

日向国有志たちの三年に及ぶ努力が、ここのように結実したのです。

七月一日に県庁が置かれると、川越は宮崎県会の初代議長に就任します。それと同時に、分県運動のころから皆と話し合ってきた、養蚕や茶の生産などのさまざまな振興策を建言し、新制宮崎県の発展に邁進しました。

また、明治二十三年（一八九〇年）には衆議院議員に選出され、国政の場で宮崎県の発展に寄与することになりました。

1889[明治22年]

町村制施行・県下100町村

地方行政の基礎制定

明治22(1889)年4月、「市制及び町村制」が施行され、本県は、宮崎、油津、都城、延岡、細島の5町と95村が置かれ、100町村となった。近代宮崎県の行政区画の基本的な区分が出来上がった。

農業における作物・牛馬などの品種改良、道路の改良、土地改良や山林開発、金融業による地場資本の育成など県勢発展の課題に向かって取組が始まった。

当時の交通事情は道路険悪で、県行政機関として8ヶ所の郡役所を置いて町村役場と連絡した。



北諸県郡都城町役場



東諸県郡役所

1885[明治18年]

宮崎県師範学校開校

学校教育の確立

明治16(1883)年、宮崎県が再置され、教員養成が急務とされた。

翌17(1884)年、文部省から学校設置の認可指令が届き、同18(1885)年2月28日開校した。(現在の宮崎公立大学のある場所)定員70名。修業年限は、高等師範科2年、中等師範科3年であった。短期養成の必要もあったので、講習期間6か月・定員60名の小学校教員養成所を設けて対応した。同19(1886)年から遠藤正が校長となる。師範学校は、明治一大正一昭和を通じて、本県教育界の中心となった。



宮崎県立師範学校



宮崎県の近代化スタート!

昭和7年完成「新宮崎県庁舎」

1932[昭和7年]

新県庁舎完成

激動の昭和の拠点

昭和初期から、新県庁舎の建設が計画されていたが、昭和6(1931)年総工費70万2000円で工事着手、翌年10月、耐震耐火の鉄筋コンクリート造(近世ゴシック式)の県庁舎が完成した。

庁舎の中央部には県会議場が設けられた。宮崎市の中央部に、堂々たる威容を誇る建築物であった。91年を経た今日では、歴史的にも価値ある建築物となっており、近代宮崎県を象徴する建物として存在し続けている。

宮崎が県都として、都城が軍都として、延岡が産業都市として、各地域の中心となり発展した。

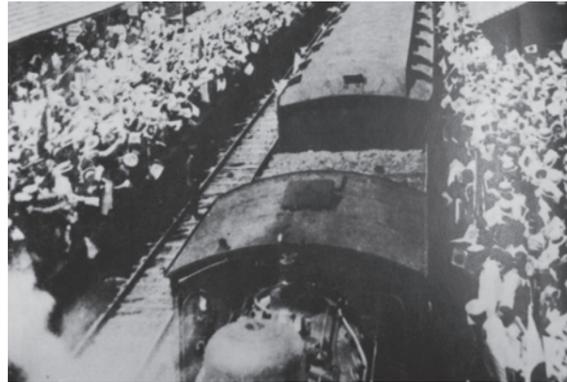


1923[大正12年]

国鉄日豊本線全線開通

県民の悲願が実現

明治22(1889)年、東海道本線が開通した。鉄道を望む声は全国に湧きあがった。日本列島の西南端に位置する宮崎県は、交通不便で中央との連絡が悪く、陸の孤島と呼ばれた。明治24(1891)年の県会で鉄道敷設の建議が可決されて以後、本県は鉄道開通を切望し続けたが、日豊本線が開通したのは、大正12(1923)年12月であった。本県の農産物・林産物・海産加工品などの生産・出荷が盛んになり、延岡には日本窒素肥料(株)が進出した。都会の文化が運ばれ、生活の洋風化が進んだ。



日豊本線開通時の富高駅

宮崎県のあゆみ 近代化の波

明治五(一八七二)年、「学制」が公布されて旧藩時代の学校は廃止され、新制度による学校を設立することが進められた。藩校や郷校も「学制」による小学校として出発した。

しかし、農村までを含めて、学齢に達した児童を全て就学させることは困難であり、また、学校数に対応するほど教師を確保することも出来なかった。人的にも経費的にも準備出来る状況ではなかったからである。近代化を担う人材育成は、何よりの急務となった。

明治六(一八七三)年、県は教員養成を急ぐために小学講習所を設け、さらに、翌七(一八七四)年に講習所を宮崎学校とした。

ところが、同九(一八七六)年八月二十一日、本県は鹿児島県に併合されたので、ようやく始動していた宮崎学校も廃止されてしまった。

明治十六(一八八三)年五月九日、本県が再置されると、教員養成が急務とされ、同十八(一八八五)年二月二十八日、宮崎県師範学校が開校した。定員七十名であった。

明治二十二(一八八九)年四月一日から、市制及び町村制が施行され、それまで三九三町村であったものが、宮崎、延岡、細島、都城、油津の五町と九十五村を合せて百町村となった。これによって、ようやく地方自治制

が発足することになった。わが国の近代化を象徴するのは何といても鉄道の開通であるが、本県に鉄道が敷設されるのは、容易ではなかった。

明治四十四(一九一)年、知事となった有吉忠一は、県勢振興策として、県営鉄道の敷設に努め、国営鉄道の誘致を急いだ。県民待望の日豊本線は、大正十二(一九二三)年十二月十五日ようやく開通した。これによって林産物、農産物の遠隔地輸送が可能となり、南瓜、キュウリなど早出し蔬菜の特産地が形成された。

また、宮崎・都城・延岡は都市化が進み、相次いで市制を施行し、延岡には旭化成の前身である日本窒素肥料株式会社が進出した。

昭和七(一九三二)年四月三十日、橋橋がコンクリート橋となり、次いで十月十四日、県庁本館が完成した。

昭和九(一九三四)年四月十一日、美々津橋の完成によって、県の南北を陸路で横断できるようになった。

この時代は、電気事業の興隆期で初期の発電所と配電事業が起こった。本県の河川は、水力発電の資源として注目され始めた。

1951 [昭和 26 年]

いしかわうち 石河内第一発電所完成

総合開発事業の展開

戦後の復興の基礎は、電力であった。国は経済復興のために電力拡充を重要政策とした。降水量も多く、山岳と河川の水力発電適地を持つ本県では、大正時代から県営電気事業の取組がなされていた。県は小丸川の電源開発に昭和15(1940)年から着手し、石河内第1、第2発電所の工事を開始したが、太平洋戦争のため、第2発電所に主力を注ぎ昭和18(1943)年竣工した。第1発電所は工事中止となっていた。

戦後復興で再開し昭和26(1951)年第1発電所が竣工した。以後、県の総合開発は進展し、渡川発電所竣工に続いて、綾川、大淀川などへ展開した。



1947 [昭和 22 年]

第1回知事、市町村長選挙

初めての公職選挙

昭和22(1947)年、米国の日本占領政策下で基本的人権の尊重・民主主義・平和主義を原則とする新憲法が制定され、婦人参政権も確立された。旧憲法下では知事は官選(政府の任命制)であった。

第1回知事選挙は、昭和22(1947)年4月に実施された。安中忠雄・二見基郷・木島昇・鈴木健太郎が立候補し、熱戦が展開された。初めての民選知事として安中忠雄が第36代宮崎県知事に選出された。市町村長選挙も知事選挙に先立って実施され、県下3市長と85町村長が、民選により選出された。県民は選挙をはじめて身近なものとして感じ取った。



1960 [昭和 35 年]

しまづ ひさなが たかこ 島津久永・貴子夫妻新婚旅行

宮崎の新婚旅行ブーム

昭和30年代後半から50年代前半にかけて、「南国宮崎」に観光ブームが訪れた。ピーク時の昭和49(1974)年には、宮崎市内に宿泊した新婚旅行客は約37万組。同年に全国で結婚したカップルの約35%にのぼるといわれている。宮崎の風土が南国のイメージに適合したと思われる。

昭和35(1960)年、昭和天皇の第五皇女・貴子様と佐土原島津家次男の島津久永氏が結婚された。その時、御夫妻は宮崎に里帰りされて、宮崎の風光が全国に紹介された。さらに同37(1962)年、皇太子殿下御夫妻が県内を旅行されて、全国に大きく報道された。この時期、県は青島・霧島・日南海岸などの観光地の公園施設の整備や植栽・遊歩道の造成などを行い、自然景観の保護に努めた。



1954 [昭和 29 年]

宮崎空港開港 極東航空(現・全日空)ローカル線

輸送の歴史的变化

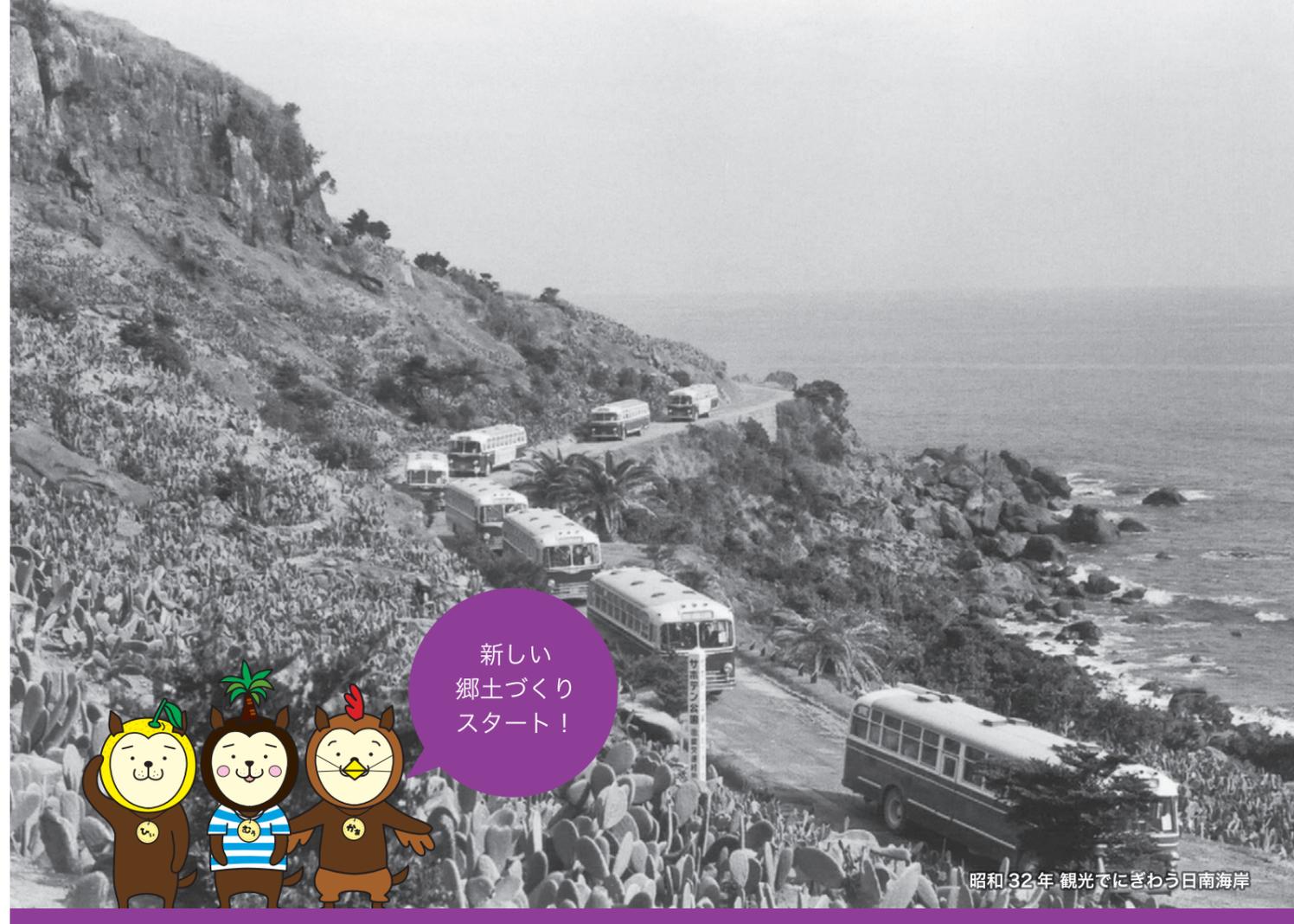
昭和18(1943)年に旧海軍飛行基地として建設された宮崎空港は、同29(1954)年に日本初の民間パイロット養成機関である国立航空大学校の訓練飛行場として開港した。

同年極東航空(現・全日空)が宮崎-福岡-大阪線を開設し、その後宮崎-大分線などを開設した。

昭和38(1963)年にはターミナルビルが完成し、同41(1966)年には1800mの滑走路が完成するなど整備が進められた。

その後、平成2(1990)年には滑走路が2500mに延長され、新ターミナルビルも完成。また、平成8(1996)年にはJRによる空港連絡鉄道が開業した。

国内主要都市や海外都市への路線も増え、国内・国際航空ネットワークの充実が図られており、宮崎の空の玄関として重要な役割を果たしている。



昭和32年 観光でにぎわう日南海岸

宮崎県のあゆみ 戦後復興と新時代

昭和二十(一九四五)年、太平洋戦争末期に、宮崎県域はアメリカ軍の激しい空襲にさらされた。六月二十九日から八月初めにかけて、延岡大空襲、宮崎大空襲、都城大空襲と相次ぎ、市街地は焼土と化した。富島(日向市)、高鍋なども激しい空襲を受けた。八月十五日、日本は無条件降伏をして敗戦国となった。戦災列島と化した国土の中で民衆は混乱と復興の苦難の日々を耐えた。

昭和二十二(一九四七)年四月、新憲法のもとに改正された選挙制度による最初の知事、国会議員、市町村長、市町村会議員などの選挙が行われた。人々は、暗い戦時体制が終って民主主義の新時代が訪れたことを感じ取っていた。

新しい教育制度は、六・三・三・四制となり昭和二十二(一九四七)年四月から発足した。多くの学校は校舎不足であったが応急の対応でしのいだ。国は一県に一の国立大学を設置する方針を進め、本県では、宮崎高等農林学校、宮崎師範学校、宮崎青年師範学校、宮崎工業専門学校の四校を基礎にして、昭和二十四(一九四九)年五月、農・学芸・工の三学部を持つ国立宮崎大学が開学し、地域文化の充実発展に資する拠点として、県民の大きな期待を集めた。

昭和三十(一九五五)年、国の経済白書は「もはや戦後ではない」という言葉を掲げ、戦後復興期から発展期に入ったことを宣言した。本県では綾川総合開発、村興し運動、教育振興(高校の新設)、細島の工業用地造成などが進められた。特に電源開発は、大淀川、綾川、一ツ瀬川、小丸川、五ヶ瀬川の水系に発電所が建設され、昭和三十年代は、電源開発の時代となった。

昭和二十九(一九五四)年十月「南国宮崎産業観光大博覧会」が開催された。この月、宮崎市に国立航空大学校が開校し、十二月には、宮崎空港が開設されて極東航空(現・全日空)ローカル線の旅客機が就航した。

昭和三五(一九六〇)年五月には、昭和天皇の第五皇女・貴子様が、旧佐土原藩島津家の後裔・島津久永氏と結婚され、新婚旅行の地として本県を選ばれたことで、一躍注目を集めた。これらの要因と、日南海岸沿いに「サボテン公園」や「こどものくに」を設立した宮崎交通をはじめとする地元の見直し整備が十分であったことが相まって、本県には空前の新婚旅行ブームが到来した。

1964 [昭和 39 年]

日向・延岡地区を新産業都市に指定

宮崎県の産業化

昭和37（1962）年、新産業都市建設促進法が公布された。重化学工業を中心とする新産業都市を建設し、4大工業地帯（北九州・阪神・中京・京浜）に集中している産業配置を転換しようとする政府の方針が示された。

我が国は、経済の高度成長によって、4大工業地帯に産業と人口が集中し、地域間格差が拡大した。また、産業エネルギーを石炭から石油へ転換するため、臨海工業地帯にコンビナートを中核とする新産業都市を建設する必要に迫られていた。

昭和39（1964）年7月、本県の「日向・延岡地区」を含む新産業都市13地区の指定が内定した。港湾に恵まれた細島には、県が早くから臨海工業地帯の造成を進めており、南九州の開発拠点としての開発が期待された。



延岡市役所

1962 [昭和 37 年]

SAP 運動開始

農業後継者の育成

昭和35（1960）年以降になると日本は経済成長期に入った。雇用を求めて農村から都市へと働き手が移動し始め、食糧生産基地をめざす本県としては、対策が必要となった。若い人々を農業の担い手として育成する農業後継者育成事業としてSAP運動が起こった。

県は市・町・村の農業青年に参加をよびかけて、SAP運動を通じて学習と実践を継続し、希望と誇りを持つ農業後継者育成に取り組んだ。

育成の場として昭和37（1962）年、宮崎県高等営農研修所（現・宮崎県農業大学校）が開設され、農業近代化を担う経営者育成に大きな役割を果たしている。



1966 [昭和 41 年]

宮崎空港 地方空港として初のジェット化

空路の高速化

昭和36（1961）年、宮崎空港は第2種空港の指定を受け、地方空港として整備が進められた。同41（1966）年には、宮崎—東京線に地方空港としてはわが国で初めてジェット機が就航した。これまで、地方空港ではジェット機を利用するための整備が整わず、条件の良い宮崎空港が初めてとなった。巨大で優美なボーイング727の姿が人々の注目を集めた。

ジェット化などに伴い乗客数も増え、昭和40（1965）年に約19万人であったのが、同47（1972）年には100万人、同54（1979）年には200万人、平成7（1995）年には300万人を超え、国内でも有数の地方空港となっている。



1964 [昭和 39 年]

県の花、県の鳥を制定

豊かな自然のシンボル

昭和39（1964）年12月、県花（ハマユウ）^{けんか}・県鳥（コシジロヤマドリ）^{けんちよう}が制定された。ハマユウは、ヒガンバナ科の亜熱帯性の植物である。青島・日南海岸などで、青々とした美しい葉を見せる。夏季に白い大きな花をつけ、芳香を放つので、民家の庭先などにも植栽される。

コシジロヤマドリは、腰に白い模様のある美しい鳥であり、キジによく似ている。日本では南九州にしか生息していない貴重なヤマドリであり、捕獲禁止になっている。県は、人工繁殖によって幼鳥を自然に放鳥している。

昭和38（1963）年の置県80周年を記念して、公募と県民の投票により制定された。



昭和 39 年 新産業都市に指定されにぎわう日向・延岡地区



宮崎県のあゆみ 高度経済成長

昭和三十五（一九六〇）年に池田勇人内閣が成立し、「所得倍増計画」を掲げた。

国においては、新幹線や高速道路等の大型プロジェクトが推進され、目覚ましい経済成長がみられた。本県では、農村から都市へ集団就職などにより人口の流出が一段と顕著になり、県人口は、昭和三十一（一九五六）年の一四万人から昭和四十七（一九七二）年までに十万人減少し、特に農村部では「三ちゃん農業」と呼ばれる労働力不足を招いた。また、全国との所得格差の是正が課題となった。

この時期に黒木博知事が「躍進県政」を目指し、米作りから畜産・園芸主体へと変革を図る農業近代化によって「日本の食糧基地」に転換しようとする政策を推進した。

農林漁業の近代化・工業の振興・産業基盤の拡充・人的資質の向上・生活環境の整備などの政策が進められた。本県農業近代化の担い手として優秀な経営者育成のため、SAP（サップ）運動が組織され推進された。農業青年の資質向上のために学習活動や実践活動が重視されて実績を挙げていった。

さらに、昭和四十七（一九七二）年

には県農業大学校が開校し、優れた人材が育成されている。

昭和三十九（一九六四）年、日向・延岡地区が、新産業都市に指定され、本県の臨海工業地帯として、期待されることになった。

昭和四十六（一九七一）年には細島港に大型の港湾施設が整備され、細島く川崎を結ぶカーフェリーと、細島く神戸を結ぶカーフェリーが就航、本県の農畜産物など生鮮食料品が直接大都市消費圏に運ばれるようになった。

宮崎空港は、昭和三十八（一九六三）年に新たなターミナルが完成し、口ーカル空港としては充実した設備を備えた。

本県の陸上交通は地の利に恵まれず、遅れがちであったが、昭和四十八（一九七三）年に九州縦貫自動車道宮崎線が着工し、昭和五十六（一九八一）年に全線開通した。

昭和五十四（一九七九）年の「宮崎国体」を契機に県民の発展意欲が盛り上がり、国を上回る経済成長率に支えられ県民所得の全国格差が縮小した。

また、昭和五十年代後半は、長年の懸案であった宮崎空港・宮崎港・宮崎学園都市等の主要プロジェクトを軌道に乗せた時代であった。

1972~2004

九州縦貫自動車道開通

高速道路時代の幕開け

九州縦貫自動車道は、北九州市を起点として福岡、佐賀、熊本各県を通過し、えびの市で分岐後、鹿児島市に至る鹿児島線と宮崎市に至る宮崎線からなる路線で、九州の骨格となる路線である。

宮崎線は昭和48(1973)年2月に「えびの～高原間」で初めての起工式を行い、昭和51(1976)年3月4日に最初の開通となった。その後、昭和56(1981)年3月17日に「高原～都城間」が開通、同年10月29日の「都城～宮崎間」の開通により宮崎線が全線開通した。

九州縦貫自動車道全線4車線化

さらに、平成7(1995)年7月27日に暫定2車線で「人吉～えびの間」の開通により、九州縦貫自動車道全線が開通し、青森から宮崎・鹿児島までが高速道路で直結された。

また、「人吉～えびの間」開通後の交通量増加に伴い、平成10(1998)年10月には「人吉～えびの間」の4車線化着手が決定し、平成13(2001)年に「えびのPA～えびのIC間」が開通、平成16(2004)年12月に4車線化が完了した。これにより九州縦貫自動車道は全線4車線化(一部6車線化)となった。



1974[昭和49年]

宮崎医科大学開学

国立大学の充実

国立宮崎医科大学は、昭和49(1974)年6月7日開校した。昭和45(1970)年、本県を含めて全国で国立大学の医学部、または医科大学を有しない県が、政府に対して国立大学に医学部を設置する運動を開始した。本県は昭和46(1971)年、県知事名で「宮崎大学に医学部を設置することについて」という要望を提起し、政府や県出身の国会議員などに陳情を開始した。翌年1月に宮崎・静岡・佐賀・島根の4県に調査費が計上されて具体的な動きが始まった。本県では、宮崎大学の移転統合による学園都市建設構想が浮上して本格化し、宮崎市南部と清武町に学園都市を建設し、医学部を配置することを決定した。昭和49(1974)年6月7日に正式開校した。

仮校舎を県総合運動公園内の建物に置き、暫定研究室を県立病院内に置いた。

昭和54(1979)年4月、建物が完成して現在地に移転した。



1975[昭和50年]

『宮崎サファリパーク』開園

日本最初のサファリパーク

昭和50(1975)年11月1日、野生の大型動物を、アフリカの草原で見ると同じように見られるという、日本初の「サファリパーク」が、佐土原町に開園した。

猛獣のいる草原の中を車で走りながら、窓越しに動物を見るというスリルと迫りに満ちた動物園である。開園の日は早朝から熊本・山口など県外ナンバーの車が列をなしたので、9時開園の予定を15分早めた。約100万平方メートルの丘陵地帯に、ライオン40頭、シベリア・タイガー10頭などの他、キリン、シマウマ等を含めて約430頭が放し飼いにされていた。車から降りてポニーやウサギなどと遊べるコーナーもあった。

園内は約5キロのコースで、客を案内するサファリバスもあった。開園当時は人気を博し、昭和51(1976)年には年間100万人を超える入園者数を記録したが、10年後の昭和61(1986)年11月に閉園となった。



1971[昭和46年]

カーフェリー就航

海上交通の充実

日本カーフェリー就航【細島～川崎】

昭和46(1971)年3月1日、日本カーフェリーが細島～川崎間に就航し、営業を開始した。午後6時、日向ターミナルから「せんとぼーりあ」号(6000トン)が、川崎ターミナルから「ふえにっくす」号(6000トン)が、それぞれ出発した。

宮崎県と京浜地方を26時間で直接つなぐ海上ルートの開始である。日向からは、乗客262人と乗用車20台、トラック15台が乗船した。トラックのうち4台には本県産の新鮮な野菜・ミカン・牛肉・ブロイラー・鶏卵などが積み込まれていた。川崎からは、約700人の乗客と乗用車100台、トラック11台が乗船していた。南九州の開国ともいえるべき時代が来た。

宮崎カーフェリー就航【細島～神戸】

昭和46(1971)年6月5日、宮崎カーフェリーが細島～神戸間に就航した。

3月の日本カーフェリーに続いての営業開始である。第1便は「はいびすかす」号(6000トン)が細島から出航した。

この間は、今までの陸路トラック輸送では23時間を要していたが、海上輸送なら15時間で運ぶことが出来る。本県産の生鮮青果物を始め、農畜産物の輸送に大きな役割を果たすことが期待された。熊本県からの牛・豚の輸送も、このルートを利用することで有利となり、利用拡大が見込まれていた。



1968[昭和43年]

細島工業港に15,000トン公共岸壁完成

海上輸送の発展

本県は、昭和27(1952)年から、細島の臨海地区の造成工事に着手し、工場用地の埋立造成、工業港の建設などが進められていた。細島から延岡にいたる臨海地区を工業地帯として建設することが期待されていたからである。

細島の港湾施設は、昭和38年度までに1万5000トン級岸壁2パースが整備された。さらに46年度までに、1万5000トン級1パース、5000トン級1パース、3000トン級1パースが完成した。南九州の農畜産物を、阪神・京浜方面へ大量に海上輸送する期待が大きくなった。



1973[昭和48年]

第24回全国植樹祭

自然の保護と創出

昭和48(1973)年4月8日、「自然の保護と創出」を大会テーマとした第24回全国植樹祭が、小林市の夷守台で開かれた。午前10時30分、ファンファーレが響く中に、花火が打ち上げられ、国旗・大会旗・県旗が掲揚された。約2万3000人が参加する中に、桜内農林大臣・文部大臣(代理)・環境庁長官(代理)などの祝辞が述べられた。続いて黒木知事が「自然の保護と創出」の決意を表明。天皇・皇后両陛下が現地地に到着され、天皇陛下がお言葉を述べられた。両陛下がそれぞれ植樹をされ、続いて参加者により2万9000本の苗木が夷守台に植樹された。両陛下は、この日の夜は、都城市の島津邸に御宿泊となり、都城市までの沿道には15万人が出て歓迎した。日本有数の森林県である本県に相応しい植樹祭となった。



1987 [昭和62年]

宮崎港が開港

物流・観光の推進

昭和62（1987）年6月3日、待望の宮崎港開港記念式典が開催された。本県にとって県中央部に大型船が入港できる港を持つことは、置県以来の重要課題であった。大淀川の河口に位置する本港は、港口を北側に開く大型港湾として計画され、昭和32（1957）年から港湾改修事業が開始されていた。

物流や観光面への大きな期待だけではなく、新しい文化の創出という時代の要請に向かって開かれたという意味も大きい。

宮崎港の開港によって、海が国際化の拠点・新しい道として位置づけられた。



1983 [昭和58年]

置県100年記念式典

県勢の発展を誓う

明治16（1883）年、鹿児島県から宮崎県を分置して以来、昭和58（1983）年で本県は「置県100年」の年を迎えた。

「置県100年」を祝う記念式典は、昭和58（1983）年5月28日、宮崎市の市民会館で開催された。ブラジルからの訪問団32人をはじめ1800人が出席し、次の100年に向かって県勢の発展と飛躍を誓う式典となった。式典は北郷町潮嶽神社の「しし舞」で開幕し、松形知事が、今後の課題に取り組む決意を述べた。置県100年を記念して、宮崎大学農学部跡地に、県総合文化公園を建設する構想、新ひむかづくり運動の展開など、力強い郷土づくりに県民の英知を結集することを呼びかけた。



歴史をつなぎ
未来へつなぐ

宮崎市街地

1994 [平成6年]

フォレストピア学びの森学校開校

全国初の公立中高一貫教育校

21世紀の日本を担い、国際社会で活躍する人材を育成しようとするリーディング・プロジェクトの1つとして昭和62（1987）年に「フォレストピア宮崎構想」が発表された。フォレストピア宮崎構想とは、県北西部の高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村、椎葉村の3町2村をモデル圏域（フォレストピア圏域）とし、森林の持つ様々な機能と山村固有の伝統的な生活文化を活かした交流及び施設設備を目指すなど、新しい山村を創ろうとするものであり、「すこやかな森」、「学びの森」、「体験の森」の3つの森林ゾーンからなる「人間性回復の森林」の整備を進めてきた。そして、平成6（1994）年に全国初となる公立中高一貫教育校の宮崎県立五ヶ瀬中学校、宮崎県立五ヶ瀬高等学校が設立された。その後、学校教育法の一部改正により、平成11（1999）年全国最初の中等教育学校、現在のフォレストピア学びの森 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に校名を変更された。

1学年40名の中全寮制。1学年から3学年までを前期課程、4学年から6学年までを後期課程とし、高等学校に相当する後期課程は全日制普通科であり、6年間を見通した教育活動を展開している。



1993 [平成5年]

宮崎学園都市完成

日本で2番目の学園都市

宮崎大学を核とした住宅都市「学園木花台」や工業団地・福祉施設などを擁する都市。筑波研究学園都市に続き日本で2番目の学園都市として竣工された。

宮崎県では、当時第2次産業が脆弱であり、大学も人文科学系統の学部が全くなく、若年層の流出が大きな問題となっていた。

その問題解決として、「宮崎大学の移転とキャンパス統合による都市整備・拡充」という宮崎学園都市構想が浮上した。あわせて宮崎都市圏の人口増加に対応するために住宅地の整備も必要とされていた。

そこで「宮崎大学の移転とキャンパスの統合による拡充」と「住宅地の開発」を軸として、進められた。

昭和47（1972）年に宮崎大学の移転とキャンパスの統合が決定し、その後各学部の移転が行われ、全学部の移転が昭和63（1988）年に完了、宮崎学園都市全体としても平成5（1993）年2月に完成し竣工式典が行われた。



昭和五十（一九七五）年、県庁本館とともに本県の歴史的建造物であった橋橋が新橋橋となって開通した。都市美を象徴した橋梁も新時代にむかって姿を変えた。

国内有数の森林資源を持つ本県では、豊かな山村地域に育まれた生活文化を学び伝えるためにフォレストピア（森林理想郷）構想を推進し、平成六（一九九四）年に全国初の公立中高一貫校（現県立五ヶ瀬中等教育学校）を設立した。五ヶ瀬町の恵まれた自然の中で感性を磨き、一人ひとりの個性を開発する教育を通して、眼を世界に開き、未来を切り拓く、創造性豊かで主体的に生きる人間の育成を推進している。

昭和六十二（一九八七）年、国民の余暇活動の充実、民間活力導入による内需拡大を目的とする総合保養地域整備法（リゾート法）が施行され、全国各地でリゾート計画が相次いだ。本県では、「宮崎・日南海岸リゾート構想」がリゾート法第一号として指定を受けた。

その後、バブル経済が崩壊し、全国的に計画頓挫が相次ぐ中、平成六（一九九四）年、同構想の中核施設として、宮崎市にシーガイアがグランドオープンした。平成十二（二〇〇〇）年七月には九州・沖縄サミット宮崎外相会合が開催され、令和五（二〇二三）年四月にはG7宮崎農業大臣会合の舞台となるなど、現在もなお本県観光の中核となっている。

平成八（一九九六）年、地方空港としては、新千歳・福岡空港に次いで三番目にJR宮崎空港連絡鉄道が開通し、特に県北からの空港へのアクセスが格段に改善された。

また高速道については平成十二（二〇〇〇）年以降、東九州自動車道の整備が着実に進展し、平成二十八（二〇一六）年には北九州市から宮崎市まで全線開通するなど、「東九州新時代の幕が開けた」。

さらに令和四（二〇二二）年には、宮崎カーフェリーの新船「たちほ」と「ろっころ」が四半世紀ぶりに就航し、「本県経済の生命線」として期待を集めている。

南九州地域は、日本の食料基地として野菜・プロイラー・肉用牛・豚など全国有数の生産地である。本県の農業産出額も常に全国上位を占めており、国内有数の食料生産県として知られている。

平成二十二（二〇一〇）年四月、都農町で口蹄疫第一例が発生、翌日には川南町での発生が確認され、その後、児湯郡を中心に感染エリアが広がり、国内では前例のない規模に拡大した。県は口蹄疫の非常事態宣言を行い、県民総力戦で口蹄疫と戦い、同年八月「口蹄疫終息宣言」を出すに至った。

この間に殺処分を受けた家畜は、総数三十万頭に及んだが、関係者一丸となった努力の成果が結実し、令和四（二〇二二）年の全国和牛能力共進会において四大会連続となる内閣総理大臣賞を受賞する成果を挙げるに至った。

宮崎県のあゆみ 県勢の発展と充実

2019 [平成31年]

みやざき林業大学校開講

林業県みやざきの未来を支える人材を育成

本県林業の成長産業化に向け、情熱にあふれ確かな知識や技術力を備えた人材の育成を図るため、県林業技術センター（美郷町）を拠点として平成31（2019）年4月に開講。新規就業者を育成する長期課程をはじめ5つの研修コースにより、本県の林業・木材産業が求める人材に対応した総合的な研修を開始した。

名誉校長に、地方創生の担い手育成への参画などで本県との関わりがある株式会社内田洋行代表取締役社長の久保昇氏を迎え、受講生が安心して充実した学生生活を送れるよう、民間企業や林業事業者、行政等の81者からなる大学校運営サポートチームにより、就学・就業・定着を見据えた協力などオールみやざきで支援する体制が立ち上げられた。

長期課程第1期生には、21名が入構し、林業の基礎からICT等最新技術の座学や実習、林業就業に必要な資格取得とともに、インターンシップ等により実践力を身に付け、全員が県内の林業事業者等へ就業した。



2015 [平成27年]

高千穂郷・椎葉山地域の世界農業遺産認定

認定を地域の活性化に

平成27（2015）年12月、高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村、椎葉村の5町村からなる高千穂郷・椎葉山地域が本県で初めて世界農業遺産に認定された。

世界農業遺産は、伝統的な農業・農法とそれによって育まれた文化や土地景観、生物多様性に富んだ世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域（農林水産業システム）を、国際連合食糧農業機関（FAO）が認定するものである。

本地域は、面積の92%が森林で、そのほとんどが傾斜地という厳しい条件の中、山肌を縫うように建設された山腹用水路で潤される棚田など、山間地域の環境と共生して、水稻、茶、しいたけ、和牛、木材生産など農林業の複合経営を確立、地域一体となって神楽などの歴史的な文化と共に継承していることが評価され、念願の認定となった。

今回の認定を受け本地域では、「活かす」「育てる」「繋げる」を活動方針として、地域活性化に向けた取組を進めている。



2000 [平成12年]

太平洋・島サミット/G8宮崎外相会合開催

国際会議都市に向けての大きな一歩

平成12（2000）年4月22日、南太平洋フォーラム（SPF）に加盟する16の国と地域による「太平洋・島サミット」が、宮崎市シーガイアのコンベンションセンターで開催された。このように多くの首脳が参加する会議が地方都市で開かれるのは日本で初めてのことであり、会議の成果は「宮崎宣言」として世界中に発信された。

また、同年7月12日から13日には、九州・沖縄サミットの関係閣僚会議である「G8宮崎外相会合」が同会場で開催された。会合では、河野外務大臣が議長を務め、九州・沖縄サミットを通じたキーワードの一つである「より安定した世界」の観点を中心に世界規模の問題や地域情勢について議論が交わされ、紛争予防のための行動計画が「宮崎イニシアティブ」として採択された。

これらの国際会議の成功は、本県が目指す「国際会議都市」の実現への大きな一歩となった。



1996 [平成8年]

JR宮崎空港線開通

航路と鉄道の連携

宮崎空港は、戦後の一時閉鎖を経て、昭和29（1954）年に航空大学の訓練飛行場として再開し、昭和41（1966）年には、新婚旅行ブームを追い風に、地方空港として初めてジェット機が就航した。

その後、平成2（1990）年には、大型ジェット機も就航するなど、空港の利用者数が年々増加したことから、更なるアクセス向上を目的に、平成6（1994）年、JR九州が主体となって日南線から分岐する形で宮崎空港線の建設が開始された。

宮崎空港線は、平成8（1996）年7月18日に、全国で4番目の空港連絡鉄道として開業し、同日には、当時の松形知事や運輸省第四港湾建設局長など関係者約100人の出席のもと、宮崎空港駅で開通式が行われた。



1981 [昭和56年]～

高規格道路ネットワークの整備

ひと・もの・いのちをつなぐ道

九州の西と東では、高速道路などの交通インフラに大きな格差があり、東九州地域は大きく後れをとってきた。このため、関係各県・市町村や民間団体が構成する「東九州自動車道建設促進協議会」や「九州中央自動車道建設促進協議会」等が結成され、政府への陳情など粘り強い活動が続けられてきた。

このような中、東九州自動車道においては、平成28（2016）年4月に宮崎市から北九州市まで一本の高速道路としてつながるという歴史的な節目を迎え、さらに、令和5（2023）年3月には日南市までつながるなど、県内の高規格道路ネットワークの整備が着実に進められているところである。

一方で、東九州自動車道の県南区間や九州中央自動車道、都城志布志道路には、未だミッシングリンクが残されており、南海トラフ地震などの喫緊の課題に対応するためにも、関係者が一丸となり、より一層の取組を進めていく必要がある。



2022 [令和4年]

宮崎カーフェリー 新船就航

宮崎と都市圏とを結ぶ「人とモノの交流を支える架け橋」

「宮崎―神戸」間を運航する宮崎カーフェリーの新船「フェリーたちほ」が令和4（2022）年4月15日に就航。また、同年10月4日には2隻目の新船「フェリーろっこう」が就航した。

県外からの誘客だけでなく、宮崎から都市部へ農産物等を大量かつ安定的に輸送する長距離フェリー航路は「本県経済の生命線」として、オールみやざきによる支援で、四半世紀ぶりの新船就航となった。

新船は、よりプライベートな空間で船旅を満喫できるよう、旧船と比べ個室を大幅に増加するとともに、「リアフリールーム」やペットと共に宿泊できる「ウィズペットルーム」なども新たに設け、多様なニーズに合わせての利用が可能となった。このほかコンサートやトークショー、グルメフェアなど、船旅ならではの、ゆったりとした時間を楽しめる演出も実施されている。

また、船の大型化によって、トラックの積載台数が増加し、大量輸送機関としてモーダルシフトの推進をはじめ、ドライバーの担い手不足や働き方改革など物流の直面する課題解決につながることを期待されている。



2010 [平成22年]

口蹄疫

口蹄疫の発生から終息、そして復興

口蹄疫との闘いは、平成22（2010）年4月20日から、8月27日の終息宣言まで、130日間もの長期に及び、ワクチンを接種したものも含め297,808頭もの家畜が犠牲となり、県内経済や県民生活へも多大な影響を及ぼした。

平成22（2010）年4月20日に都農町で1例目が確認された口蹄疫は、児湯郡を中心に感染エリアが広がり、7月4日に宮崎市で最終発生例（292例目）が確認されるまで、5市6町で発生し、移動・搬出制限区域は、宮崎県内で8市11町1村に及んだ。

平成22（2010）年5月18日には、都道府県では初の「口蹄疫非常事態宣言」を行い、畜産関係者のみならず、県民全体も行動の制限を余儀なくされた。

口蹄疫に感染した牛や豚は、殺処分が行われ、埋却された。また、まん延防止のためのワクチン接種と予防的殺処分も実施され、8月27日ようやく終息を迎えた。

口蹄疫の終息後、生産者をはじめ関係者一体となって、「忘れないそして前へ」を合言葉に家畜防疫を標準装備とした畜産業の再生・復興を着実に進めた結果、平成24（2012）年長崎県で開催された第10回全国和牛能力共進会において、本県は「種牛の部」で内閣総理大臣賞を手にし、復興を果たした。

さらに、令和4（2022）年鹿児島県で開催された第12回全国和牛能力共進会においても、新設された7区（脂肪の質評価群）を制するとともに「肉牛の部」で史上初の4大会連続となる内閣総理大臣賞を獲得し、今大会のテーマに掲げられた「和牛新時代」が求められる「和牛のおいしさ」において、「宮崎牛が日本一」であることを証明した。



2004 [平成16年]

第55回全国植樹祭

空と海 心をつなぐ 森づくり

平成16（2004）年4月25日、第55回全国植樹祭が、本県を会場として開催された。今回のテーマは「空と海 心をつなぐ森づくり」で、本県が会場となるのは、31年ぶり2回目である。

25日、天皇・皇后両陛下をお迎えして、西都市で記念式典が挙行された。県内外からの招待者・協力者・出演者など総勢約1万人が出席して、西都原の会場を埋めた。

国土緑化推進機構会長の河野洋平氏が「国民参加の森づくりを強力に進めたい」と挨拶し、天皇陛下のお言葉に続いて、緑化運動ポスター入賞者や、緑化運動功労者などの表彰があり、両陛下がイチイカシ、オビスギなどをお手植えされた。

アトラクションでは、本県出身のカウンターテナー米良美一氏が出演して、幻想的な音楽で盛り上げた。式典前後して約7000人の招待者が、西都市南方の「向陵の丘」で植樹を行い、ヤマザクラとオビスギなど8450本の苗木を植えた。

両陛下は、御陵墓参考地の男狭穂塚、女狭穂塚に参詣された後、県立西都原考古博物館を見学され、その後佐土原町の県工業技術センターを視察された。





1979 [昭和54年]

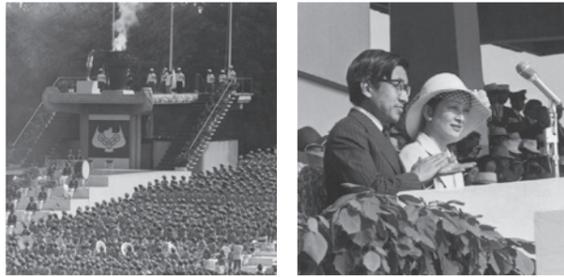
第15回全国身体障害者スポーツ大会開催

ふれあう心・あふれる力・伸びゆく郷土

第15回全国身体障害者スポーツ大会は、昭和54(1979)年10月27日・28日「ふれあう心・あふれる力・伸びゆく郷土」をスローガンに、県総合運動公園で開催された。

皇太子ご夫妻をお迎えして開会式が行われ、晴れ渡った青空にファンファーレが高らかに響いた。スタンドを埋めた2万7000人の観客から、拍手と歓声が湧き起こった。

参加選手は47都道府県と9政令都市から、大会史上最高の902人。大会は2日間にわたって行われ、第1日は車いすバスケットなど5競技、第2日は陸上・卓球など6競技が実施された。



1979 [昭和54年]

第34回国民体育大会開催

日本のふるさと 宮崎国体

本県は、昭和54(1979)年に「日本のふるさと宮崎国体」と名づけて第34回国民体育大会を開催した。

夏季大会は、9月16日から4日間、県総合運動公園水泳場を主会場に開かれ、本県選手は4競技に史上最高の156人が参加して熱戦を展開した。成年女子100m平泳ぎで平野美幸選手(旭化成)の優勝をはじめ、水球、漕艇、ヨットなどで女性選手の活躍が目立った。

秋季大会は10月14日から6日間、県総合運動公園陸上競技場を主会場に、県内9市6町2村の会場で開催され、本県選手は25競技に907人が参加した。

男女総合優勝をめざして各競技とも熱戦を展開し、11競技20種目の優勝を果たし、天皇杯・皇后杯を獲得した。

この国体を契機にして、本県のスポーツは著しく発展した。



1995 [平成7年]

県総合文化公園グランドオープン

県央の一大文化ゾーンの完成

宮崎県の「置県100年記念事業」として昭和58(1983)年に以降整備を進めてきた県総合文化公園が、平成7(1995)年10月16日、グランドオープンした。県立美術館で開かれた記念式典で、松形知事は「まさに宮崎の文化元年。リゾート宮崎、農林水産の宮崎などいろいろな顔を持つ宮崎に、文化の薫り高い宮崎という新しい顔が加わった」と挨拶した。

県総合文化公園は、宮崎大学農学部跡地16.5ヘクタールを利用して、総事業費約400億円の県単独事業として整備を始めた。昭和63(1988)年県立図書館、平成元(1989)年に県民広場、平成5(1993)年に芸術劇場と次々にオープンした。

隣接して宮崎神宮や県総合博物館もあり、本県の一大文化ゾーンが完成した。



1993 [平成5年]

第10回世界ベテランズ陸上競技選手権大会

生涯スポーツの祭典

平成5(1993)年10月7日から17日までの11日間県総合運動公園陸上競技場にて生涯スポーツの祭典「第10回世界ベテランズ陸上選手権宮崎大会」が開催された。

第10回の記念大会で、アジアでは初めての開催となった。大会には、元五輪選手のフランク・シューター(米国)、君原健二、宗猛選手ら特別招待選手を含む男子40歳、女子35歳以上の陸上競技愛好者など、世界71カ国の地域から過去最多となる約1万2000人が参加した。

10月9日に行われた開会式には、秋篠宮ご夫妻もご出席され、選手観客約2万人が参加した。開会式では幼稚園児のマスゲームや太鼓でつづるプロローグ「神々の饗宴」に続き、アルゼンチン選手団を先頭に約5000人の選手、役員による入場行進が行われた。

高齢化、情報化、国際化が進む中、「変化と交流の時代」にふさわしく各選手が年齢に応じ、力を発揮し熱戦を繰り広げた。国境を越えたスポーツ交流は、県民に数多くの友情と感動のドラマを残した。



本県では、昭和五十四(一九七九)年の第三十四回国民体育大会「日本のふるさと宮崎国体」の開催に向け、当時東洋一の規模といわれた県総合運動公園の整備を皮切りに、県内各地に充実した運動施設が整備されてきた。
同三十四(一九五九)年の読売巨人軍宮崎キャンプ以来、プロスポーツキャンプの受入を行っていたが、平成八(一九九六)年、県は、スポーツを通じた交流人口の増加による経済の活性化のため、官民一体となった「スポーツランドみやざき推進協議会」を設立し、広報や受入体制整備、キャンプ・合宿誘致活動を積極的に展開した。
本県の年間を通じて温暖な気候と、県内各地の充実した施設、そして、おもてなしの県民性と相まって、各種のスポーツ大会会場やプロスポーツチームのキャンプ地として利用されるようになった。
平成十三(二〇〇一)年には、日本スポーツマスターズ2001が行われ、翌年には2002サッカーワールドカップのドイツ代表チームと、スウェーデン代表チームのキャンプ地となった。
平成十五(二〇〇三)年には、宮崎市に生目の杜運動公園がオープンし、ソフトバンクホークスのキャンプ地として、キャンプ時期には、九州全域から多くのファンを集めている。
平成二十一(二〇〇九)年には、第二十二回全国スポーツ・レクリエーション祭、令和元(二〇一九)年には、ワールドサーフィンゲームスが開催された。
近年でも、令和五(二〇二三)年二月に、同年三月に開催された第五回WBC(ワールド・ベースボール・クラシック)

宮崎県のあゆみ スポーツ・文化の発信

ク)日本代表の強化合宿が開催されるとともに、屋外型トレーニングセンター(アミノバイタルトレーニングセンター)・同年四月開業を、整備するなど、「スポーツランドみやざき」を積極的にPRしている。
明治時代後半、本県でもようやくジャーナリズムの発達が見られ、新聞・雑誌の発行がはじまった。大正時代、日豊本線の全線開通や教育の普及により識字率が高まって購読者層が増えたことなどから、大きく発展した。昭和に入り、戦時体制の強化から、言論統制とパルプ資源節約などを背景に一県一紙化が進み、昭和十五(一九四〇)年、本県では日向日新聞が創刊された。
昭和五十八(一九八三)年、置県一〇〇年を迎え、文化の三大事業として「総合文化公園づくり」、「県史編さん」、「新ひむかづくり運動」に取り組み、同六十三(一九八八)年に県立図書館が完成、平成五(一九九三)年に県立芸術劇場、同七(一九九五)年に県立美術館が完成した。芸術劇場では、同八(一九九六)年に第一回「宮崎国際室内楽音楽祭」が開催され、世界的な音楽家アイザック・スターン氏が来県した。
また、平成二十一(二〇一〇)年には、第三十四回全国高等学校総合文化祭が「とき放て創造の力 熱き太陽の光と共に」をテーマに開催された。
さらに令和三(二〇二一)年には、国文祭・芸文祭みやざき2020が「山の幸 海の幸 いざ神話の源流へ」をテーマに開催され、本県の文化を県内外に発信するとともに、県民が本県文化の魅力に改めて触れる貴重な機会を創出した。

2017 [平成29年]

祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク登録

尖峰と渓谷が育む森と水、いのちの営みを次世代へ

平成29(2017)年6月、宮崎県(延岡市・高千穂町・日之影町)と大分県(佐伯市・竹田市・豊後大野市)にまたがる祖母・傾・大崩山系とその周辺地域がユネスコエコパークに登録された。

ユネスコエコパークは、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的として、昭和51(1976)年にユネスコが設けた世界的なモデル地域で、本県では綾ユネスコエコパークに続いて2カ所目の登録となった。

祖母・傾・大崩地域は、急峻で独特な景観美を有する山々が重なり、ブナやモミなどの原生林が広がるとともに、特別天然記念物であるニホンカモシカをはじめ希少動植物の宝庫としても知られており、自然と人が共生する暮らしを続けながら、次世代へしっかりと受け継いでいくことを活動理念として、地域住民や関係団体等が一体となって取組を進めている。



2021 [令和3年]

第35回国民文化祭・みやざき2020 第20回全国障害者芸術・文化祭みやざき大会

県内の文化芸術を全国へ発信

第35回国民文化祭・みやざき2020、第20回全国障害者芸術・文化祭みやざき大会は、新型コロナウイルス感染拡大により令和2(2020)年度の開催を延期し、令和3(2021)年7月3日から10月17日まで開催した。

本大会は、「山の幸 海の幸 いざ神話の源流へ」をキャッチフレーズに、天皇后両陛下がオンラインで御臨席のもと幕を開けた。

会期中は、県及び市町村実行委員会の主催事業として、県内各地で地域色にあふれた様々な分野の110事業と、令和2(2020)年度開催のさがしげプログラム34事業を合わせ、144の事業について感染症対策を講じながら実施し、関連事業等を含め延べ約56万人が参加した。

また、リモートによる出演やオンライン配信なども活用し、宮崎の文化を県内外へ発信し、県民が本県文化の魅力に改めて触れる貴重な機会を創出した。



2010 [平成22年]

第34回全国高等学校総合文化祭

文化系活動のインターハイ

平成22(2010)年8月1日から5日にかけて第34回全国高等学校総合文化祭が開催された。

演劇、郷土芸能、日本音楽など24部門に、全国から延べ2700校の約2万人が参加し、「とき放て創造の力 熱き太陽の光と共に」をテーマに成果を発表した。

総合開会式は宮崎市民文化ホールで行われ、宮崎県内の高校生と教員約1000人が出演と運営を担い、器楽演奏から「船出」をテーマにした構成劇など多彩なステージが繰り広げられた。秋篠宮ご夫妻や次女の佳子様をはじめ約1700名の観客を迎えた。

開会式に続いて、橋通りで約2000人によるパレードも行われた。



2019 [令和元年]

2019 ISAワールドサーフィンゲームス

世界のトップサーファーが宮崎に集結

令和元(2019)年9月7日から15日にかけて、2019 ISAワールドサーフィンゲームスが、宮崎市の木崎浜で開催された。

本大会は、サーフィンの世界チャンピオンと国のランキングを決定する選手権であり、世界を目指すサーファーにとっては、「サーフィンのワールドカップ」として認知されている。

また、東京オリンピック2020の出場選考も兼ね、世界のトッププロが出場することもあり、世界中から注目を集めた。

本大会は、55の国と地域から約400人の選手・スタッフが参加するとともに、9日間の開催期間中、延べ8万8000人の観客が訪れた。

国際サーフィン連盟 (ISA) のアギーレ会長をはじめ関係者からは、本県の世界レベルのサーフィン環境と受入体制の素晴らしさが評価され、「サーフランドみやざき」を世界に向けて大いにPRする機会となった。



2001 [平成13年]

新県営野球場 「サンマリノスタジアム宮崎」オープン

太陽と海の新球場

平成13(2001)年2月25日、宮崎市熊野に新県営野球場「サンマリノスタジアム宮崎」が開場した。

記念試合として巨人一広島島のオープン戦が行われ、県内外から3万人のファンが押し寄せた。同球場の名付け親の一人、巨人の長嶋茂雄監督をバッテリーに迎え、松形知事の始球式で試合が開始された。

本県田野町出身の木村拓也選手や、巨人の松井秀喜選手が出場し、球場を揺るがす拍手が起こった。同球場は、国内3番目の内外野天然芝の球場で、総工費137億円をかけて完成した。



2009 [平成21年]

第22回全国スポーツレクリエーション祭 「スポレクみやざき 2009」

皆こね 笑顔まんかい 神話の国

全国47都道府県のスポーツ愛好者が参集する「スポレクみやざき2009」が、平成21(2009)年10月17日開会した。

午後0時半から、会場の県総合運動公園陸上競技場で開会行事が行われ、全国から選手・監督・観客など約1万5000人が参集した。

会場では、東原知事が「ようこそ宮崎へ」と歓迎して開会を宣言し、主催者の鈴木寛文部科学副大臣が、「スポーツ活動を通じて、国内外の選手と交流の輪を広げてほしい」と挨拶した。大会は県内15市町を会場にして24種目の競技を20日まで繰り広げた。



1996 [平成8年]

第1回「宮崎国際室内楽音楽祭」

宮崎に「世界の音」が響く

平成8(1996)年3月12日、「宮崎はアイザック・スターン氏のヴァイオリンで春がきます」をキャッチフレーズに、第1回宮崎国際室内楽音楽祭が始まった。

国内有数のコンサート専用ホールを持つ県立芸術劇場で、記念すべき第一夜が開幕した。今世紀最後の巨匠と呼ばれるアイザック・スターン氏のヴァイオリンを聴こうと、福岡県・佐賀県などからも団体の大型バスが詰めかけた。

初日は、世界の頂点に立つスターン氏とイエフム・ブロンフマン氏のデュオ・リサイタルで、モーツァルト、ブラームスのヴァイオリンソナタなどで聴衆を魅了した。



2002 [平成14年]～

国内外代表チームのキャンプ合宿受入

「国際水準のスポーツの聖地みやざき」への飛躍

平成14(2002)年に日本と韓国で共同開催されたFIFAワールドカップサッカー大会では、宮崎市が全国で唯一、1つの自治体で2カ国(ドイツ・スウェーデン)の代表チームの事前合宿地として選ばれた。

これを皮切りに、本県の優れた受入環境が高く評価され、ラグビーの日本代表やイングランド代表の合宿、WBC日本代表「侍ジャパン」の4回連続となる強化合宿など、国内外のトップチームを相次いで受け入れることとなった。

特に、令和3(2021)年に開催された東京2020オリンピック・パラリンピックでは、ドイツ陸上チームやアメリカ女子サッカーチームなど、6競技・8カ国の代表12チームを受け入れ、その全ての競技でメダルを獲得しており「縁起の良い」「結果の出る」合宿地として本県の評価が高まった。

さらに、令和5(2023)年4月の屋外型トレーニングセンター供用開始により、トップアスリートの合宿環境が充実していくことで、「国際水準のスポーツの聖地みやざき」としてのブランド力向上などが期待される。



宮崎県郷土先覚者

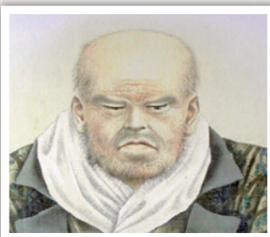
日本の歴史の中に大きな功績を残した偉人達の人生を知り、

その足跡を辿ることで、現代を生きるみなさんの一つの道標として頂きたいと思えます。

先覚者たちが生きた時代や背景を知ること、また、先覚者としての功績と、エピソードを知ること、新たな魅力を感じられるのではないのでしょうか。

安井 息軒

1799-1876

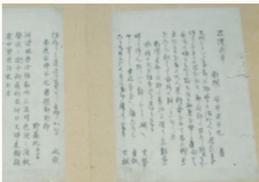


学問に生涯を捧げた儒学者。国と故郷のため、信念を持って学び続け、多くの優秀な人材を育てた先覚者。

江戸時代後期の儒学者。清武郷中野(宮崎市清武町)に生まれる。昌平坂学問所などで学び、1831(天保2)年に藩校振徳堂の設立に伴い助教に任命され、父滄洲とともに飢肥(日南市)へ移った。その後、江戸に出て幕府から学問所の儒者を命じられる。また、三計塾を開き、谷千城・陸奥宗光をはじめ幾多の人材を育てた。



■安井息軒旧宅



■紀行文「志濃武草」

三好 退蔵

1845-1908



儒学的教養をもとに近代司法制度を取り入れ、その適切な運用につとめた先覚者。

明治時代の司法官、弁護士、高鍋(高鍋町)に生まれる。明倫堂や安井息軒に学び、1873(明治6)年に司法省に入り判事となった。伊藤博文の憲法調査に随行し、ヨーロッパの司法制度を調査した。1891(同24)年に起こった大津事件当時は検事総長を務めていた。のちに大審院長(現在の最高裁判所長官)に就任した。



■三好退蔵が院長となった当時の大審院

伊東 マンショ

1570-1612



天正の少年使節としてヨーロッパに行きローマ教皇に拝謁した国際交流の先覚者。

天正遣欧使節の正使。都於郡(西都市)に生まれる。マンショは洗礼名。キリシタン大名大友義鎮(宗麟)の縁戚にあたり、伊東氏の没落とともに豊後国(大分県)に移る。1582(天正10)年にローマへ向け出発。1585(同13)年にローマ教皇に公式謁見をした。1590(同18)年に帰国し、イエズス会に入った。



■マンショが生まれ育った都於郡城跡

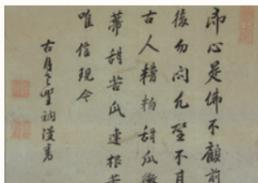
古月 禅師

1667-1751



大光寺中興の住職として、進んで寺院の刷新に努力し、民衆の教化につとめた先覚者。

江戸時代の僧侶。広瀬村(宮崎市佐土原町)に生まれる。臨済宗古月派の祖。大光寺(同市同町)や京都で仏典を修める。1702(元禄15)年豊後国(大分県)に古月庵を営み、1704(宝永元)年に大光寺に請われて戻り住持となる。民間布教も積極的に行い、佐土原地方には自身が作った一般民衆にわかりやすく人の道を読む「いろは口説き」などが今なお伝わる。



■僧古月書

川越 進

1848-1915

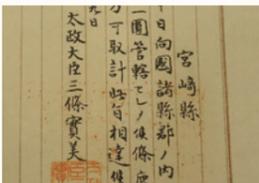


宮崎県再置運動の主導者として活躍し、後世でも「宮崎の父」として愛される先覚者。

明治時代の政治家。加納村(宮崎市清武町)に生まれる。鹿児島県会議員、同議長として、鹿児島県に編入されていた旧宮崎県の分県運動に奔走し、1883(明治16)年5月9日、宮崎県の再置に成功した。その後、宮崎郡長を経て、第1回総選挙に当選し衆議院議員として国政に尽力した。



■宮崎県再置当時の県庁舎



■宮崎県再置の太政官達

高木 兼寛

1849-1920



医学、軍人、経済人、経営者、教育者、政治家、開拓者、芸術家、宗教家、多彩な才能を持つ先覚者。

明治・大正時代の医者。穆佐(宮崎市高岡町)に生まれる。成医会講習所(のちの東京慈恵会医科大学)や看護婦教育所(日本初の看護学校)の設立者。東京海軍病院長や海軍軍医総監などを歴任。脚気予防に成功した。わが国最初の医学博士の一人で、「ビタミンの父」とも呼ばれる。



■フェロシップ・ディプロマ受賞
留学時代、当時イギリス医師として最高の栄誉賞を受賞した。



■成医会講習所第一期生
帰国後、1881年「成医会」結成。患者の立場に立った医師を養成した。





宮崎県市町村地図

宮崎県のキャッチフレーズ
「日本のひなた宮崎県」



「日本のひなた宮崎県」は、温暖な気候やおいしい食べ物、温かい県民性など、宮崎の特徴を分かりやすく伝えるキャッチフレーズです。ロゴマークは、そのような「ひなた」のチカラを表現しているデザインになります。



宮崎県民歌

1. 青い空光ゆたかに
陽に映えてお山脈
黒湖岸にあたかく
南の風のさわやかに
夢をよぶ 幸をよぶ
あ、わが郷土宮崎県
2. 新しい息吹にもえて
産業の伸びゆくところ
われら共に手をとって
いま躍進のこの力
夢をよぶ 幸をよぶ
あ、わが郷土宮崎県
3. はまゆうの香りもたかく
花ひらく明日への文化
とおい歴史をしのびつつ
ともに築こう理想郷
夢をよぶ 幸をよぶ
あ、わが郷土宮崎県

明るく堂々と ♩ = 104 作詞 酒井 祐春 | 作曲 飯田 信夫

置県 140 年記念 「宮崎県 140 年のあゆみ」

発行日 令和 5 年 3 月
発行 宮崎県総合政策課
制作 明巧堂印刷(株)

小村 寿太郎



母国の国際的地位を高めるため列強諸国を相手に精力的な外交交渉を展開、国の発展のために尽くした。先見の目と揺るぎない信念を持ち合わせた先覚者。

明治時代の外交官。飢肥(日南市)に生まれる。藩校振徳堂で学び、文部省第1回留学生となって渡米。帰国後は官僚となり、司法省から外務省に転じ第1次・2次桂太郎内閣の外相となる。1902(明治35)年の日英同盟や1905(同38)年のポーツマス条約の締結、1911(同44)年の関税自主権回復などに尽力した。



ポーツマス講和会議場

上原 勇作



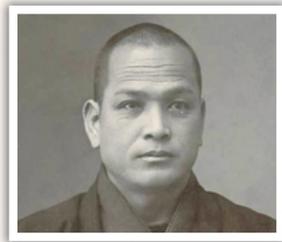
郷土を愛し、その発展に尽くし、郷土の青少年教育のために文庫を創設した先覚者。

明治～昭和時代の陸軍軍人。都城(都城市)に生まれる。1912(明治45)年に第2次西園寺公望内閣の陸相に就任。その後、参謀総長などを歴任し、元帥に列せられた。郷里の上原文庫の設立に際し多数の蔵書を寄贈したり、旧制都城中学校(都城泉ヶ丘高校の前身)の教育の充実に尽力するなど青少年の育成に力を注いだ。



大正8年当時の上原文庫

石井 十次



児童福祉制度が無かった時代において、生涯児童救済に尽力した「児童福祉の父」。

明治時代の社会事業家。上江村(高鍋町)に生まれる。岡山県甲種医学校に学ぶも、1887(明治20)年に孤児教育会を設立し、医書を焼いて孤児救済に専念。1906(同39)年には東北凶作地の孤児貧児救済に着手し、1200人を岡山孤児院に收容。1909(同42)年には移転に着手し、茶臼原(西都市・木城町)に分院を開設した。わが国における「児童福祉の先駆者」と言われる。



密室教育

岡山孤児院児童

若山 牧水



酒を愛し、旅を愛し、自然を愛した歌人。日本各地を巡り、歌のこしながらも、常に故郷を思い続けた先覚者。

明治・大正時代の歌人。坪谷村(日向市東郷町)に生まれる。本名は繁。早稲田大学在学中に、北原白秋らと交友。尾上柴舟に師事。1909(明治42)年に刊行された歌集『別離』によって名声を高めた。『海の声』『みなかみ』『山桜の歌』など計15冊の歌集を発表し、旅と自然とふるさとを愛した国民的の歌人として広く親しまれている。



昭和3年最後の旅姿

書齋にて





宮崎県人会世界大会
Miyazaki Kenjinkai World Conference



宮崎県